

Jugend Philharmoniker

2025.7.6

MUZA Kawasaki Symphony Hall

20th Anniversary series
vol.1

j u g e n d
philharmoniker

ごあいさつ

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカ第5回特別演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

2025年、ユーゲント・フィルハーモニカは創立20周年を迎えます。これまでの20年間の中で、首都圏ホールでの定期演奏会や特別演奏会をはじめ、長野県や福島県での地方公演、音楽祭への参加や介護施設・病院・動物園での訪問演奏など、のべ130回を超える演奏機会に恵まれました。楽団として、「老舗」とはいかないまでも「中堅」に足を踏み入れつつある我々ですが、設立当初から掲げる「社会にオーケストラがどのように貢献していくかを模索する」という理念、初心を忘れずにこれからも活動に励んでまいります。

さて、創立20周年記念シリーズと題しまして今回の第5回特別演奏会と3月の第20回定期演奏会では、通年でブラームスの交響曲全曲に取り組みます。ブラームスは、旗揚げ公演となる第1回定期演奏会で交響曲第1番を取り上げた当団にとっては非常に思い入れの深い作曲家です。指揮は当団と長年の信頼関係があり、ドイツ語圏の音楽に造詣の深い田中一嘉先生。田中先生の指揮のもとで奏でる対照的な性格を持つ交響曲2曲をぜひお楽しみいただけたら幸いです。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたってご協力いただきました皆様、そしてご来場いただきました皆様に、心からの御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対して引き続きのご期待と変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひいたします。

ユーゲント・フィルハーモニカ代表 三宅雅也

ユーゲント・フィルハーモニカー

第5回 特別演奏会

2025年7月6日(日) 18:15開場 19:00開演

ミューザ川崎シンフォニーホール

プログラム

J.ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 Op.68

J.Brahms: Symphony No.1 Op.68

J.ブラームス：交響曲第2番 ニ長調 Op.73

J.Brahms: Symphony No.2 Op.73

指揮=田中一嘉

演奏中は携帯電話の電源をお切りください。

演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

カーテンコールのみ撮影いただけますが、周りのお客様のご迷惑とならないようご注意ください。



指揮 田中一嘉

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。指揮を斎藤秀雄、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。コントラバスを江口朝彦、堤俊作の両氏に師事する。在学中より同大オーケストラ定期演奏会、オペラ公演等を指揮し、斎藤秀雄、森正、秋山和慶の各氏、及びプローダス・アール氏、河野俊達氏、フランコ・フェラーラ氏らの指導を受ける。学外では、藤原歌劇団、東京アカデミー合唱団指揮者として、数多くのオペラ、宗教音楽分野での実績を積む。1976年、大学在学中に第4回民音指揮者コンクール（現東京国際指揮者コンクール）入選。奨励賞受

賞。卒業後、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮者、群馬交響楽団指揮者を歴任。これまでに東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、札幌交響楽団、九州交響楽団、千葉交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢等、日本の主要オーケストラを指揮する。1992年にはヤナーチェク春の国際音楽祭（チェコ・オストラヴァ）にてヨーロッパデビュー。1995年にはカルロビ・ヴァリ交響楽団を指揮。2000年ドイツ・ロットヴァイル夏の音楽祭、2001年ベルリン日本週間での公演、2003年ウィーン・ムジークフェラインザールでの日墳合同第九演奏会等を指揮。教育方面では作陽音楽大学（現くらしき作陽大学）、昭和音楽大学・大学院の非常勤講師として長年、後進の指導に力を注ぐ。また、日本各地のジュニアオーケストラの指導、指揮など、その活動は多岐に及んでいる。公益財団法人千葉交響楽団の特別支援学校への移動音楽教室の指揮、また30年以上にわたり全国聾学校合奏コンクール（公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会主催）の審査委員を務めるなど福祉教育にも積極的に取り組んでいる。

ユーゲント・フィルハーモニカー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユングオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（＝プロオケには出来ないこと）」を追求している。

曲紹介

ヨハネス・ブラームス（1833–1897）の交響曲第2番は、交響曲第1番のおよそ1年後に初演されたが、その当初から、2つの交響曲は対照的に語られることが多かった。ウィーンで交響曲第2番の初演を聴いた批評家でブラームスの友人エドゥアルト・ハンスリックは、次のように言い表している。「1年前に演奏された第1交響曲は、[……] いわばルーペを使ってしか聴くことのできない、本格的な音楽愛好家のための作品だった。[いっぽうの] 第2交響曲は太陽のように輝き、愛好家であれアマチュアであれ、良い音楽を欲するすべての人を暖かく包み込む。」

初演後の評価だけでなく、完成までに要した時間も、完成した作品に対するブラームス自身の評価も、ブラームスに近しい人々からの感想も、どれをとっても対照的な2つの交響曲を、少しづつ紐解いていきたい。

J.ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 Op. 68 [1876]

ベートーヴェンが1824年に合唱付きの交響曲第9番を発表して世間を驚かせて以来、あとに続く交響曲がどのようなものであるべきか、という議論は尽きず、同時代の作曲家たちの悩みの種となっていた。ハンブルクに生まれ、20歳でロベルト・シューマンに認められたブラームスも例外ではない。ブラームスがいつか交響曲を書きたいという思いは、遅くとも1859年にはあったようで、翌年にはクララ・シューマンが彼に交響曲の作曲を勧めている。2年後の1862年夏、ブラームスは指揮者の友人に、のちに交響曲第1番第1楽章の一部となる音楽を聴かせたが、これが休止を経て完成するまでには、実に14年の月日を要することとなった。

1870年代はじめ、自信を失っていたブラームスは別の指揮者の友人に「交響曲はぜったいに作曲しない！」と宣言したという。しかし、1872年から75年にかけてウィーン楽友協会の芸術監督として交響曲を含む多くのオーケストラ作品を指揮した彼が、自らの交響曲をより具体的に思い描くようになっていったことは想像に難くない。1874年には、楽譜出版者のジムロックに交響曲を取り掛かっていることを示唆し、1876年の夏の休暇に入る6月までに第1楽章を完成させた。そして、9月末までを過ごしたドイツのリューゲン島ザスニッツ、ハンブルク、リヒテンタール（バーデン＝バーデン近郊）でさらにこれに取り組み、10月中旬に全4楽章のオーケストレーションを終える。

ウィーンで初演する案もあったが、「まずは良い友、良いカペルマイスター（指揮者）、そして良いオーケストラのある小さな街で聴きたい」というブラームスの希望で、友人オットー・デッソフの指揮するカールスルーエ宮廷劇場管弦楽団の演奏により、1876年11月4日に初演された。その後、年内にマンハイム、ミュンヘン、ウィーンと上演は順調に続き、翌年1月にはライプツィヒで披露

された。その稽古を聴いたクララ・シューマンは日記に感動を綴っている。「素晴らしい壮大で、圧倒される交響曲！とりわけ最終楽章の独創的な序奏にはすっかり魅了された。とても暗く、破滅的な序奏がしだいに晴れやかなモティーフへ向かう様は、まるで長く退屈な冬が明けた春の空気のよう」。

重厚な序奏ではじまるソナタ形式の第1楽章の旋律には、半音階進行が多く使われ、深刻で運命的な曲想を形作る。一転してノスタルジックな旋律美に彩られた第2楽章は、「優雅に」と指示された間奏曲風の第3楽章へと続く。クララ・シューマンを魅了した第4楽章の序奏の後半では、ホルンによる朗々とした主題が歌われるが、これは1868年にブラームスがクララの誕生日に「高い山から、深い谷から、あなたに何千回でも挨拶しよう」という詞とともに書き送った旋律と酷似している。ベートーヴェンの「歓喜の歌」を思わせる主部では、それまでの動機が形を変えて現れ、華やかに幕となる。

第1楽章 Un poco sostenuto - Allegro

第2楽章 Andante sostenuto

第3楽章 Un poco allegretto e grazioso

第4楽章 Adagio - Più andante - Allegro non troppo, ma con brio

J.ブラームス：交響曲第2番 ニ長調 Op. 73 [1877]

1877年5月末に交響曲第1番の清書を出版社に送ったブラームスは、6月からオーストリア南部ヴェルター湖畔のペルチャッハで初めて夏を過ごした。交響曲第2番に取り組み始めた具体的な月日は明らかになっていないものの、彼が自身の作品目録の第2交響曲のところに「1877年夏、ペルチャッハ」と書き込んでいることから、この作品の大部分がこの時期、この場所で書かれたことは確かである。ブラームスは、冒頭の批評を書いたハンスリックにも、ペルチャッハの与えるインスピレーションと新しい交響曲について報告している。「冬に〔新しい〕交響曲をお聴かせします！[……] こんなのは芸術ではない、とあなたは言うでしょう。ヴェルター湖は自然のままで、飛んでくる旋律を踏みつけないよう気をつけなければなりません。」こうしたエピソードは、ブラームスの第2交響曲が「ブラームスの田園交響曲」とも呼ばれる所以のひとつである。

同年9月後半のリヒテンタール滞在中にはすでに交響曲が「頭のなかでは」完成しており、10月中旬までにスコアが書き上げられたため、新しい交響曲は4ヶ月ほどの間に完成したことになる。10月にブラームスのピアノ演奏でこの曲の第1楽章を聴いたクララ・シューマンは、第1交響曲よ

ステージ配置図

りも観客に評価されることを確証した。ブラームス自身も（これもまた第1交響曲とは対照的に）第2交響曲の出来栄えに満足していたようで、すぐさまウィーンでの初演に向けて交渉を始める。こうして1877年12月30日、ウィーン宫廷歌劇場オーケストラの団員（現ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）の定期演奏会で、ハンス・リヒターの指揮によりウィーン楽友協会で初演された。初演の日、ブラームスは出版者のジムロックに「懸命に稽古し、演奏し、そして褒め称えてくれました。こんなことは今までにありません！」と報告している。

ウィーンの初演は、ハンスリックが綴っているように「決定的な成功で、観客からも暖かく迎えられた」。続く他の都市での上演も同様で、翌年6月にデュッセルドルフの音楽祭で演奏された交響曲第2番を聴いたクララ・シューマンは「オーケストラ作品でこれほどの歓喜を味わったことはない」と日記に書き記した。

牧歌的なホルンの第1主題ではじまる第1楽章では、第2主題でブラームスの「子守唄」が短調で奏される。チェロの旋律とファゴットの対旋律ではじまる讃歌のような第2楽章に続く第3楽章は、不規則なアクセントによるリズムの伸び縮みが軽快な1曲。第4楽章では推進力のある主題が次々と現れ、壮麗に締めくくられる。

第1楽章 Allegro non troppo

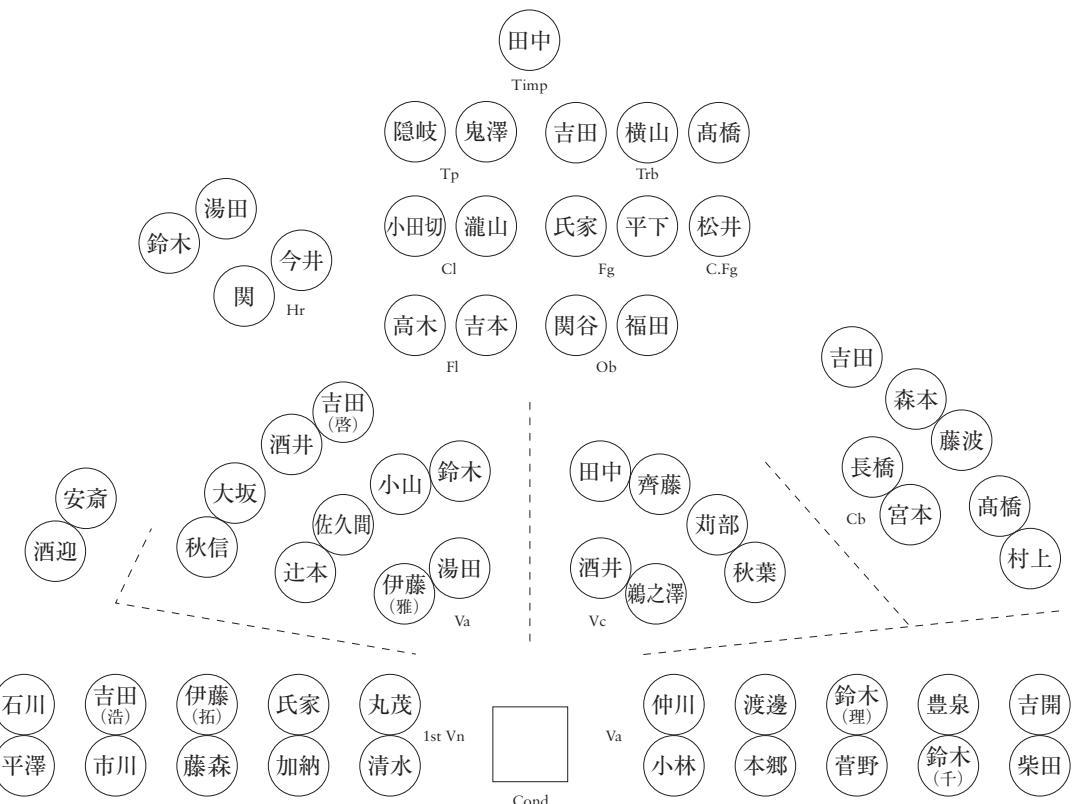
第2楽章 Adagio non troppo

第3楽章 Allegretto grazioso (Quasi andantino) - Presto ma non assai

第4楽章 Allegro con spirito

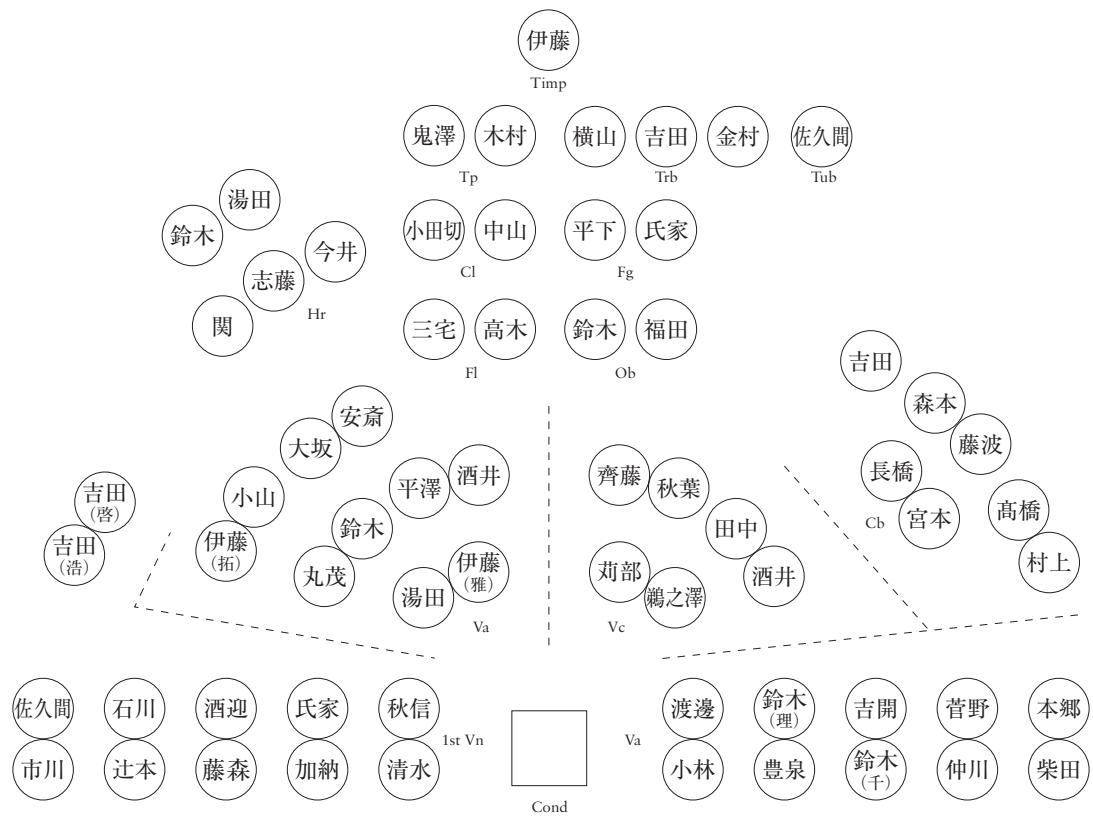
中村伸子（音楽学・元団員）

交響曲第1番



出演者

交響曲第2番



Violin	Viola	Flute	Trumpet
秋信有花	菅野実菜歩	高木 捷	隱岐麻美
安斎拓志	小林賢人○	三宅雅也◇	鬼澤大地
石川律	柴田淳志	吉本奈美	木村沙織
市川徹	鈴木千奈		
伊藤拓也	鈴木理美	Oboe	Trombone
伊藤雅也○	豊泉友里絵	鈴木 瞭	金村優祐
氏家夏子	仲川 咲	関谷麻衣	高橋絢子
大坂純蓮	本郷一真	福田有花	横山桃花
加納千裕	吉開未菜実		吉田 智
小山響子	渡邊絢音	Clarinet	
酒井歩峻		小田切広洋	Tuba
佐久間椋子	Violoncello	瀧山早貴	佐久間 直
酒迎千晴	秋葉涼太	中山哲兵	
清水貴則☆	鵜之澤航平○		Percussion
鈴木麻衣子	苅部千紘	Bassoon	伊藤 瞳
辻本茉里奈	齊藤 韶	氏家秀徳	田中浩平
平澤卓也	酒井嶮甫	平下恵梨	
藤森智代	田中 亮輔	松井一晃 (賛助)	
丸茂友里			
湯田茜音○	Contrabass	Horn	☆=コンサートマス ○=パートリーダー
吉田啓悟	高橋龍太郎	今井雪乃	◇=インスペクター
吉田浩美	長橋花織	志藤 豪◇	
	藤波 梢	鈴木萌美	
	宮本貴幸○	関 護和	
	村上慶乃介	湯田怜央奈	
	森本峻世		
	吉田颯人		

☆=コンサートマスター
○=パートリーダー
◇=インスペクター

アンケートのお願い

本日は、私どもの演奏会にご来場いただき誠にありがとうございました。
今後の演奏活動の参考にさせていただきますので、
皆様のご意見・ご感想をお聞かせください。
QRコードまたは下記のURLよりアクセスいただき、ご回答ください。



<https://forms.gle/7qzo6R1ibuvrj68G6>

*後日ご案内をお送りしますので、アンケートにご連絡先をご記入ください。

今後の演奏会

第20回定期演奏会(創立20周年記念シリーズ2)

J.ブラームス：交響曲第3番 ヘ長調 Op.90

J.ブラームス：交響曲第4番 ホ短調 Op.98

指揮=田中一嘉

2026年3月15日(日) 13:15開場 14:00開演

ミューザ川崎シンフォニーホール

チケット発売：2025年12月14日(日) 10:00

<http://jugend-phil.com>

Twitter @jugend_phil

Facebook www.facebook.com/jugendphil

Instagram @jugend_phil

YouTube www.youtube.com/user/jugendphil

チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報が
スマホで確認できるようになりました！



演奏会の概要



演奏曲の試聴



チラシ画像



プロモーション動画



楽団からの
メッセージ



楽団のWebサイト
SNS

アクセスはこちらから！



スマホのカメラを起動し、こちらのQR
コードにカメラをかざしてください